

「逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え」

text：渋澤 健

第10回 逆境に打ち勝つための「人的資本」

渋 沢栄一の時代には日本を取り巻く多くの地政学的な逆境がありました。当時の世界列強の争いの中、日本はいかに繁栄できるのか。その答えは富国強兵だけではなく、渋沢が実業界から引退した後も晩年まで老骨に鞭を打った経済界の活動の中でありました。民間外交です。

日米交流に注力しただけでなく、欧州ではアルメニアなどの小国も含め、東アジアにとどまることなくインドの有識者とも交流に努めました。民間の立場でありながらも、渋沢が多くの国々との関係に高い意識を抱いていた理由は、以下の言葉から読み取れます。

「彼我経済上の親善は、やがて政治上の親善となって、国際間の平和が保護さ

れるのである。」

（「渋沢栄一訓言集」・国家と社会）

経済と政治と国々との間に、平和な相互関係があり、世界の平和が脅かされている逆境を収めるのは政治だけで解決することなく、経済の役割もある。また、経済活動が持続可能になるのは平和が前提にある。従って、経済人としても、三位一体の関係向上に能動的に努めることが責務であるという視座です。

世の中の地政学的リスクという逆境が高まっている昨今に、世界平和を象徴する広島でG7サミットが開催されました。今こそ、渋沢の考えを我々経済人が再考すべきではないでしょうか。

サミット開催の直前、岸田文雄首相はアフリカ4カ国へ渡航しトップ外交され



逆境の時こそ、力を尽くす

ました。岸田首相が今回のアフリカや3月にインドへ訪問したことはG7議長国としてグローバルサウスを取り残さないという意思表示です。これからの時代の世界における日本の国家スタンスとして重要なことでありましょう。

私はゴールデンウィーク中に外務省が企画した官民合同ミッションで、24社・約50人の民間団長としてアフリカのモザンビークを訪ねました。ご多忙な行程の中、岸田首相が現地で開催された経済交流会にお立ち寄りくださったことから、日本政府の当地への民間投資の期待感が読み取れます。

もし渋沢が現在にいたら、これから著しい発展の可能性あるアフリカへの関係構築に必ず関心を抱き、以下のような

言葉を現地で発していたと確信しています。

「一国の進運は人に由る。」

（「渋沢栄一訓言集」・一言集）

150年前に、世界列強の争いの中、途上国であった日本の豊富な資源とは端的には水と森しかありませんでした。そして、人です。日本は「人的資本の向上」により、数十年間で逆境に打ち勝ち、当時の先進国の仲間入りを果たしました。78年前の戦争の焼け野原の逆境から日本は再び「人的資本の向上」により、80年代には世界第2位の経済大国という座を得ました。

その実績を持つ日本が再び「人的資本の向上」に意識を高めるべきと、岸田政権の「新しい資本主義」の実行計画は示しています。その意義とは、自国はもちろんのこと、Made With Japanという精神でアフリカなどのグローバルサウスと共に、新しい時代の価値を共創する成功体験を後世に残すことであると思います。

逆境に打ち勝って、日本の新しい時代への扉を開くのは「人」です。